

文芸

俳句

花吹雪ここが舞台の様に舞う
池田 逸子
北窓を開けて座敷の安堵かな
伊藤 敬子
更衣ださい男がイケメンに
今関満喜子
見慣れば仕草かわいぬ蜷かな
魚地 照子
日を追って増える水田や風光る
江森 悦子
愛の巣と番燕は休みなし
川島 通則
トーカーを父と視ている春の夢
向後 寛
玻璃越しに耀う朝の山若葉
越川せつ子
行きずりの会釈が嬉しい若葉風
越川 義則
作文の花丸咲いて卒業す
小松 藤男
鐘楼の撞木を揺らす春嵐
佐瀬 輝夫
葛若葉オルガンの音の幾重にも
椎名万里子
淑やかに囁き交す若葉かな
鈴木とし子
若葉風通る参道深大寺
鈴木 利子
電鉄の窓に広がる春キャベツ
玉虫 栗扇

若葉立つ野辺も一気に入動く

土屋美枝子

桃咲いて溪の水ひく柵田かな

土屋 義昭

しらじらと障子の明るき明け易し

戸村 静華

公園のぶらんこ風の中にあり

早川 勇

棚出でてしまへば自在藤の花

藤田 雅夫

短歌

上京の兄居なき家さみしきか
女孫は夕食言葉なく食む
鈴木まさ子
坂田池に八十数羽の鴨は群れ
水面を自在に泳ぎあるなり
平山 芳子
じゃが芋の芽を掻きながら触る土
けふはわづかな温もりのあり
青木 秀子
飛ぶやうに走る子犬を追ふ野原
六十五歳我が身忘れて
八角 三枝
師も友も気兼ねするなき教室に
ヨガを学びぬ元氣をもらふ
田崎 尚美
明日葉の茎切り置けば滲みくる
汁は生薬指に舐めたり
押尾 輝子
花冷えと言へども寒き一日終へ
雲の切れ間に星の光れり
西山満里子

歌舞伎座のこけら落としに着てゆくと
着物引き出し選ぶも楽し
島田ますみ

春くれど山肌雪に真白かり

巨大ダム湖は未だ動かず

凛とした川島正次郎の銅像に
もみぢの若葉淡く影なす
水須 俊

うららかな春ともなりて植ゑられし
早苗はりと空にむかへり
浅野 榮子

スコールの中を抜ければ晴れし空
わが乗るバスは光の中行く
椎名美枝子

流れ落つ滝を思はせ白藤の
深山の中に咲き盛りあつ
芹川 初子

咲き盛る藤の花房川の面に
映りて揺れに揺れてあるなり
斉藤 つね子

一日のドラマたためて沈む日か
その静かさに心ひかるる
高梨 キヨ

行商も部落の店も閉店し
老いて不便となりし身となり
内藤 くに

嫌はれし農家の嫁に来手がなく
今では機械化女手使はず
伊藤 定男

こうほう 博物館 63

町指定の仏様

町内には四件の県指定文化財の仏様があり、いずれも今から千年ほど前の平安時代終わりから鎌倉時代の作である。また、町指定文化財の仏様も一件あり、これも同じころに作られたものと言われている。今回はこの町指定の仏様について紹介しよう。

町指定の仏様は現在、宝米の明光院宝蔵寺に安置されているが、以前は宝米の森深いお堂に安置されていたという。その像は三像あり、中央がひとときわ大きく、薄い衣をまとっただけで、右手を挙げ、左手を下げ、親指と人差し指を付けた来迎印を結ぶ阿弥陀如来像である。両側の小さい像は、脇侍と言われる阿弥陀如来の弟子に当たる観音・勢至菩薩像である。こ

の三像は合わせて阿弥陀三尊とも呼ばれ、鎌倉時代に流行った善光寺信仰にあやかつて作られたと言われる。しかし、この三像のうち、主尊の阿弥陀像が先に作られ、脇侍は後から作られたとも言われている。その後の修理を経て現在の姿になっているが、森深いお堂にあったため、風通しが悪く、腐朽が進んで痛ましい姿になってしまった。

6月22日から町民ギャラリーで仏像展が開かれ、本像を拝むことができる。



◀明光院の木造阿弥陀三尊像